報恩講が終わった翌日二十八日は、毎月の定例聞法会「聞光道」の日でした。今回は、事前にお約束のお客様がおられました。長坂幸子様と名倉幹様のお二人です。長坂幸子様は、お母さまの長坂るり子様の御縁で、この度初めて長仁寺まで、夜行バスに乗って単身お参りに見えました。お母さまは昨年、お浄土へ旅立たれました。そのお母さまのお遺骨といっしょに来てくださいました。そして名倉幹様は、ニューヨークで開教使をされているのですが、長坂幸子様からご紹介いただき、メールの交換を始めたのは昨年の九月でした。お目にかかるのは初めてです。一月に一時帰国するから、そのときに長仁寺をお訪ねしたいと申し出て下さいました。名倉様には、聞光道でこれまでの歩みを語って頂きました。聞光道には、いつもの友松法純さん、佃賢一さん、新開清英さん智英さん親子、宇佐から渡邉和義さん末子さんご夫婦のほか、その日は星明庵の奥村さんご夫妻がお参り下さいました。そして友松徹心さん、富山県のお二人の坊守さん、中臣みきさん、立野奈津子さんは報恩講からお参りでした。そして婦人会の奥様たちも数名お参りでしたから、いつもの三倍もの人数でした。在家出身でありながら、僧侶を志し、今はニューヨークに渡って開教使として布教に専念しておられる名倉様の、どのようないきさつで仏道を歩むようになったのか、そのドラマティックな過程をつぶさに聞かせて頂きました。そのあと、名倉様が長年実践されておられる静坐についてご指導頂きました。

　私は、名倉様のお話を伺っているうちに、この方が大石法夫先生に御縁をいただかれたならいいのになあと勝手なことを思っていました。誰もが認めるエリート街道を外れ、落ちたところで聞いておられるのです。大石先生のことを知られたらきっと喜ばれるだろうと思っていると、住職もまったく同じように感じたようで、大石先生の手書きの御書信をお渡ししておりました。きっと読んでくださることでしょう。

翌朝、報恩講の一日目からつづけてお泊りになっていた愛知県の平松仁さんと長坂幸子さん、名倉さん、わたしたち二人の計５人は、長男の真人さんに先導してもらい、長仁寺から車で二十分くらいの青の洞門へ向かいました。お三方ともいっしょに、中津駅から昼二時頃の電車で発つというので、それまでの時間、耶馬渓をご案内することにしました。青の洞門を少し先へ行くと、羅漢寺です。そのまた奥は古羅漢です。時間に余裕があるので、まず古羅漢を上ることになりました。素朴なお顔をした多くの石仏が、急な坂の岩場に鎮座しておられました。羅漢寺は、お釈迦様がご説法されたギシャクッセンに形状がよく似ているといわれている岩山の中腹にあるお寺です。お天気もよく、久しぶりに外の空気を吸ってとてもさわやかでした。高い石段を上るのはきつかったのですが、たのしい時間でした。

　お釈迦様がインドでおさとりを開かれて仏教は誕生しました。それから約二千五百年の時がたち、日本において、法然上人、親鸞聖人によって仏教は完成されたと説く先生もおられます。羅漢寺の参道には、廃仏毀釈の影を留める首がはねられた石仏を目にしました。長い歴史の中で、仏教はさまざまに変遷し、今、私にまで届けられてきました。人間に生まれることの有難さ、そして仏法に遇わせていただいたことの幸せを思います。今年の秋には住職坊守のお役を譲らせて頂く予定になっています。住職坊守として勤めさせていただく報恩講は、今年で最後となりました。いつまでも生きているわけにはいきません。昼から夜への移行のような、一つの節目です。しかし仏法の歩みはつづきます。時を超えた永遠の時間の中で、時間と空間の制約を受けつつ、いっとき時と場を同じくした六人の男女が、後になり先になりしながら岩山を共に上りました。それぞれの宿業を背負いながら。

なむあみだぶつ　なむあみだぶつ　　合掌　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　法喜

　

（お願い）

去る1月12日に長仁寺役員新年会議が開かれ、今年度の本山経常費について協議決定されました。今年度は来る2023年にお迎え致します宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要について、門徒一戸あたり2000円の懇志金もございます。これについては「東本願寺・長仁寺宗費袋」とは別に白い封筒をお配り致します。できるだけ一括でお願いしたいのですが、場合によっては分割でもかまいません。出費多端のおり御門徒様にご負担を強いることとなりたいへん心苦しいのですが、どうかご理解賜りますようお願い申し上げます。ご不明の点がございましたら、地区の総代さんか世話人さんまでおたずね下さい。二つの袋は2月15日ごろ配布の予定です。

　報恩講

　1月二十五、二十六、二十七の三日間、愛知県豊田市から渡邉尚子先生をお迎えして、報恩講を勤めさせて頂きました。渡邉先生の御法話は、浄土真宗の極めて基本的な自分を照らして頂くお念仏のお話でした。煩悩具足の私は、阿弥陀仏に救って頂かねば、どうにもなりません。南無阿弥陀仏と申させていただいて、下がらない頭を下げさせて頂くのですね。大石先生は、「私は念仏を称えるために生まれてきました」とおっしゃって下さいました。そこでどんな人生も完結するのですね。私はお念仏が欲しかったのでした。念仏の無い人生は、どこまで行っても満足がありません。今年の報恩講はお泊りの方と毎晩遅くまで語り、賑やかでした。寝不足で疲れもピークを越しましたが、「身を粉にしても」「骨を砕きても」と口をついて出、一年に一度、こんな時間が持てることは、物金に換えられない幸せだと思いました。御門信徒の皆さまに御礼申し上げます。なむあみだぶつ　なむあみだぶつ　　合掌

　1月二十六日、報恩講中に六名の方が帰敬式を受けられました。

　お参りの方が見守る中、厳粛におかみそりが執り行われました。お釈迦様の弟子として、これから聞法に精出し、ご信心を深めて行ってくださることと思います。住職は、最後の報恩講に六名もの御門徒様が自ら発心されて法名を頂かれたことに感慨無量の様子でした。「本願」、「本願」と常々法話でお話している願いが、それぞれの方々に届いたのでしょう。どの方の法名にも「願」の一文字が入っていました。

　おめでとうございます！　なむあみだぶつ　なむあみだぶつ　　　　　　　　　合掌